

宋代の草の単位「束」と「圀」について

西 奥 健 志

〔抄 録〕

宋代では、草を数えるときの単位として「束」と「圀」の2つの表記を用い、それぞれの重量を、日野開三郎氏の推定に従って、束13斤・圀20斤としてきた。しかしながら、宋代の各種文献上において、同一の史料でありながら、束と圀という異なる単位が用いられ、日野氏の説に従えば大きな矛盾を含むものとなるケースが多数見られる。

本稿では、日野説の有効性について考察を加え、「束」と「圀」の関係を明らかにすることを目的とする。

キーワード：宋、束、圀、日野説

緒 言

宋代、草の単位には「圀」と「束」という異なる2つの表記が用いられる。この2つの単位について、日野開三郎氏は表1の①②③の3例をあげ、束と圀の重量を推定する根拠としている⁽¹⁾。

表1 草の単位

	重 量	品 目	単 位	時 代	出 典
①	11斤	草	束	唐	『元氏長慶集』37
②	20斤	禾草	圀	唐	『元氏長慶集』37
③	13斤	稗草・馬草	束	宋	『宋会要』食貨39-18
④	13斤	草	束	宋	『河防通議』下
⑤	15斤	梢・葦	束	宋	『河防通議』下
⑥	30斤	荊	束	宋	『河防通議』下
⑦	15斤	秸	束	金	『金史』卷47
⑧	10斤	草	束	元	『元史』卷96
⑨	15斤	草	束	明	『欽定続文献通考』2
⑩	10斤	草	包	明	『天下郡国利病書』卷32

*『河防通議』は、元の沙克什が金の撰人不明の『河防通議』と宋の沈立の撰した河工の書を合わせ、整理して一書としたものである（神田信夫 山根幸夫編『中国史籍解題辞典』燎原書店 1989）。時代は宋の草と重量が同一であるから、宋と推測した。

この3例から、唐代の束を11斤、圀を20斤、宋代の束を13斤とした。宋代の圀の重量については、未だに文献にその説明記述を見いだすことができていないが、氏はそれについて、「この唐制がそのまま宋代に承継がれ、変りなかったかどうか、上述の束の例より推してすこぶる疑いなきを得ないが、宋代に適切な史料を求め得ていない現在、この唐制を重要な参考とするほかない。」と述べ、保留つきながら宋代の圀も20斤とする（以下、日野説）。宋代の草の単位については、多くの研究が日野説に依拠しているため、日野説＝草の単位となっているのが現状である⁽²⁾。

宋代財政上における草の位置は、決して低いものではなく、例えば至道末年における草の実収額は「草三千余万圀」⁽³⁾、嘉祐中は「二九四〇万束」に達する⁽⁴⁾。日野説に従って、圀を束に計算し直すと、実際の徴収量は約4615万束になり、単位の違いが財政に与える影響も小さくはない。筆者は日野説を無批判に受け入れることには、賛成できない。以下、本稿では宋代財政史料を扱う準備作業として、日野説の有効性について考察を加え、「束」と「圀」の関係を明らかにすることを目的とする。

第1章 宋代の「束」と「圀」

唐代については、日野氏が示したように束11斤・圀20斤という史料が存在するので（表1①②）、本章で詳しく言及することは避け、宋代の圀を20斤と考えることが可能であるかを中心に議論を進めることとする。

天禧元年7月と天聖元年2月の開封府の和買草について『長編』には、

①『長編』巻90 天禧元年7月辛酉

三司請依常歲於開封府界均買草千余万圀、上以螟蝗為害、慮煩民力、令中書・樞密院議其可否。

②『長編』巻100 天聖元年2月甲辰

饑畿内民所逋体量草。畿内体量買草凡千万束、輸未及半、而雨久不止。

とあり、開封府内で束と圀の2つの単位を使用している。このことから、束と圀が明代の「束」と「包」のように⁽⁵⁾、地域によって異なるものではないことがわかる⁽⁶⁾。日野説に従えば2つの史料は草の買い上げ量が異なることになるが、『宋会要』には、

③『宋会要』食貨37-8 市易 天禧元年7月

三司言、乞依常年例於開封府界体量取買程草千余万束。帝以螟蝗為害、慮煩民力、令中書・樞密院議其可否。

とある。①③は同じ事を述べた記事であるにもかかわらず、草の単位が異なる。これを日野説に従って束を基準にして計算すると、『長編』の記述は約1540万束となり、『宋会要』の記述1000万束の1.5倍以上を買い入れることとなり、明らかに不自然である。開封府では、天聖7年⁽⁷⁾・宝元

2年⁽⁸⁾にもそれぞれ1000万束の草を和買している。畑地氏によると、草1000万束を畿内の地において収市し、京師の馬の飼料として納入することは定額化していたということなので⁽⁹⁾、「1000万束」が正確な数字と思われる。それでは、①の「圀」という表記はどのように考えればよいのか。景德4年の開封府の和買草に関する『長編』と『宋会要』の記述には、

④『長編』卷67 景德4年10月庚申

至是、年穀屢登、輦下物価甚賤、畿内和市已及七百圀、乃詔滑・曹・許・鄭等州所納芻藁、並輸本処。

⑤『宋会要』食貨37-4 市易 景德4年10月

詔。滑・曹・許・鄭等州所納芻藁、並輸本州、不須至京。…中略…。至是、年穀屢稔、輦下物価甚賤、畿内和市已及七百万圀。故有是命。

とある。④の「700圀」は「700万圀」のあやまりであると思われるから⁽¹⁰⁾、④⑤は同じ事を述べた記事である。④⑤はともに「圀」という単位を使用しており、開封府の和買には「圀」も使用されていたことがわかる。束と圀が筆記する過程で誤記される可能性が低いことを考えると、①が誤りである可能性は低い。『長編』・『宋会要』・『宋史』その他の史料のなかで、同一の記述を照合していくと、史料①③同様、いくつかの記述で束と圀の単位の違いが現れる(表2参照)。日野説に従えば、表2の各事例は同一の記事でありながら、買い付け額や価格が異なり、大きな矛盾を含むものとなる。また、束は表1の④～⑥の例から明らかのように、対象物によって重量が異なるが、仮に1束を13斤として固定していれば、このようなことは起こらないはずである。以上のような事例は、日野氏が言うように束と圀がそれぞれ異なる重量を有していると考えることを困難にするものである。

表2 圀・束対照表

	記 事	出 典
①	詔兗州歲課民輸黃蓍、荊子、芟十六万四千八百束。	『宋会要』食貨70-158 錫雜錄 至道元年11月
	詔除兗州歲課民輸黃蓍、荊子、芟芟十六万四千八百圀。	『長編』37 至道元年2月丁酉
②	每歲京城市草六十六万六千束。	『宋会要』兵卷24-1 馬政 咸平3年
	每歲京城草六十六万六千圀。	『文献通考』160 馬政
	每歲京城草六十六万六千圀。	『宋史』198 兵12 馬政
③	茶園稅每三百文折納絹一匹、三百二十折納紬一匹、十文折納綿一兩、二文折納禾草一束、	『長編』282 熙寧10年5月庚午
	初、蜀之茶園、皆民兩稅地、不殖五穀、唯宜種茶。賦稅一例折輸、蓋為錢三百、折輸紬絹皆一匹。若為錢十、則折輸綿一兩。為錢二、則折輸草一圀。	『宋史』184 食貨下6 茶下
④	…草一圀、計虛實錢四百八十五、而茶一大斤止易草一圀。	『長編』54 咸平6年正月壬寅
	…草一束、計虛實錢四百八十五、而茶一斤止易草一束。	『宋会要』食貨39-2 市糴糧草 咸平6年正月
⑤	司馬光曰、…昔太宗平河東…、米一斗十餘錢、草一圀八錢、	『宋会要』食貨4-17 青苗 熙寧2年11月19日
	昔太宗平河東、立和糴法、時米斗十餘錢、草束八錢、…	『三朝名臣言行錄』7 司馬光
⑥	自改法至今、凡得穀二百八十八万余石、芻五十六万余圀、而費緡錢一百五十五万有奇、茶・塩・香・藥又為緡錢一千二百九十五万万有奇。	『長編』170 皇祐3年2月己亥
	凡得穀二百二十八万四千七百八十九碩、草五十六万六千四百二十九束、而給錢一百九十五万六千五百三十五貫、茶・塩・香・藥一千二百九十五万三千八百二十一貫。	『宋会要』食貨36-29 權易 皇祐3年2月

第2章 「束」と「圀」の関係

第1章において、日野説だけでなく、束と圀が異なる重量を有する単位であるとする前提そのものが成立し難いことを確認した。本章では、日野説に代わって束と圀の関係を規定し直す。

『吐魯番出土文書』アスターナ506号墓文書43「唐上元二年蒲昌県界長行小作具収支飼草数請処分状」(73TAM506:4/40(a))⁽¹¹⁾（以下『文書』）には束と圀の関係について興味深い事例が記述されている⁽¹²⁾。

□十八束上（每一束三尺三圀） 六百四十八束

六百五十束下（每一束二尺八圀）

・・・中略・・・

四百三十束上（每一束三尺三圀） 四百三十束（每一束三尺一圀）

四百三十五束下（每一束二尺八圀） （ ）は小字

『大唐六典』巻17 典厩令の註には「圀毎に三尺を以て限りと為すなり。」とあり、『文書』に「一束毎に三尺三の圀」「一束毎に二尺八の圀」等とあることから、1束とは周囲3尺前後（1圀）のモノの束（たば）、1圀とは周囲3尺前後の太さのモノ（1束）を数える語と考えることができる⁽¹³⁾。1束と1圀は、ともに周囲3尺前後のモノを数えるときに使用する単位と考えれば、対象物が同じならば1圀も1束も重量は変わらないということになり、同一史料に束と圀を使用したこと（表2参照）、対象物によって重量が異なること（表1④～⑥）も当然であると言える。

ただ、税の徴収や馬草の支給規定を定める場合には、一定の基準を設けなくてはならない。周囲3尺という規定では、徴収重量にばらつきがでることが予想され、全国一律に一定額を徴収しようとした結果、1束は〇〇斤・1圀は〇〇斤という重量による統一が図られたものと思われる。『文書』の事例は、場所によって1束のなかみそれぞれの太さが異なり、円周の長さが異なったというだけで、束そのものはどの場所でも同じ基準に基づいて（重量か？）徴収されたはずである。圀と束の間に差はなく、草を徴収するときに1束の重量が13斤とされれば、草13斤分の周囲の長さが1圀になる。以上のことから、少なくとも宋に限って言えば、草1束が13斤とあり、他に事例が見出せないのだから、圀も13斤とするのが妥当であろう。

結 語

束と圀の关系到検討を加えた結果、日野説が成立し難いことを確認した。束と圀は、周囲3尺前後のモノを数えるときに使用する単位であって、対象物が同一で1束の重量が△△斤であ

れば、1 圀の重量も△△斤である。

最後に唐代の束が11斤・圀が20斤と表記されたことについて言及しておきたい。両方とも駅伝の馬に対する馬草の供出に関する記述であるから、対象物が異なると考えることはできない。推測ではあるが、乾草と青草の違いがあったのではないだろうか⁽¹⁴⁾。束と圀の関係が本論で述べたようなものである以上、唐代に於いても日野説に関係なく考えるべきである。

〔注〕

- (1) 日野開三郎「北宋時代の所謂『草』について」(『東洋史学』2・4 1951・52)、後『日野開三郎東洋史学論集』第13巻(三一書房 1993)所収。
- (2) 例えば、畑地氏も束と圀の重量については、日野説を参考としている。畑地正憲「宋代における草の調達と商品化について」(川勝守編『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』中国書店 1993)。
- (3) 『文献通考』巻4 田賦考4。
- (4) 『端明集』巻22 「論兵十事」。
- (5) 明代、南方では草10斤を1包とし、北方では15斤を1束とした(表1⑨⑩参照)。谷光隆『明代馬政の研究』(東洋史研究会 1972)、353頁参照。
- (6) 河北についても『長編』巻184 嘉祐元年10月丁卯に、
先是、提拳羅便糧草薛向建議、並迎十一州軍歲計粟百八十万石、為錢百六十万緡、豆六十五万石、芻三百七十万圀、…以下略…
と見え、同じく巻190・嘉祐4年12月甲申には、
河北一路諸軍牧地剩田三千三百五十余頃、得歲課斛斗一十一万七千八百二石、絹万三千二百五十一匹、草十六万一千二百三十束。
とある。河北でも束と圀の混在が見られる。
- (7) 『長編』巻108 天聖7年9月癸未。
- (8) 『宋会要』食貨39-18 市糴糧草 宝元2年9月9日。
- (9) 注(2)畑地論文参照
- (10) 開封府の和買草の総額が通常1000万束であることを考えれば、700圀では明らかに少なすぎる。
- (11) 『吐魯番出土文書』〔四〕(文物出版社 1996)より。
- (12) 李錦綉氏は、『大唐六典』と『文書』とを対比する形で、蒲昌県が所属する西州の1束は六典の1圀に等しく、束と圀は例の通り時により場所により異なるものであるという見解を示している。李錦綉『唐代財政史稿』(上巻)(北京大学出版社 1995)、1180頁註②参照。
- (13) 『養老律令』厩牧令には、
駑馬稻一升、乾草各五圀、木葉二圀、周三尺為圀、青草倍之。
とあり、周囲3尺が1圀である。
- (14) 馬草に使用されるようなものではないが、『河防通議』巻下「芟草青雜柴」には、

濕重三十斤、半乾重二十三斤、至入場時重一十五斤全乾。

とある。乾燥したものとそうでないものの重量が異なるのは当然である。

〔付記〕

本論執筆後、劉進宝「唐五代“税草”所用計量単位考釈」（『中国史研究』2003-1）が発表されていたことに気がついた。氏は、「捆」には大小2つの場合があり、小の場合は本稿と同様の史料を用いて束と捆の関係を同じものとし、大の場合は1捆は10束であるとする。しかし、1捆が10束という大の場合は、宋代では確認することはできないし、氏が主張の根拠とする史料についても疑問がある。また、『元氏長慶集』巻37の史料（本稿表1① 束＝11斤）を示しながら、同書同巻の史料（表1② 捆＝20斤）については、氏の説（1捆は10束）と異なる結果が得られるにもかかわらず、何ら言及がない。以上の点から、捆には大小2つの場合があるという氏の主張は、成り立たない。

（にしおく けんじ 文学研究科東洋史学専攻博士後期課程）

（指導：宮澤 知之 教授）

2003年10月15日受理